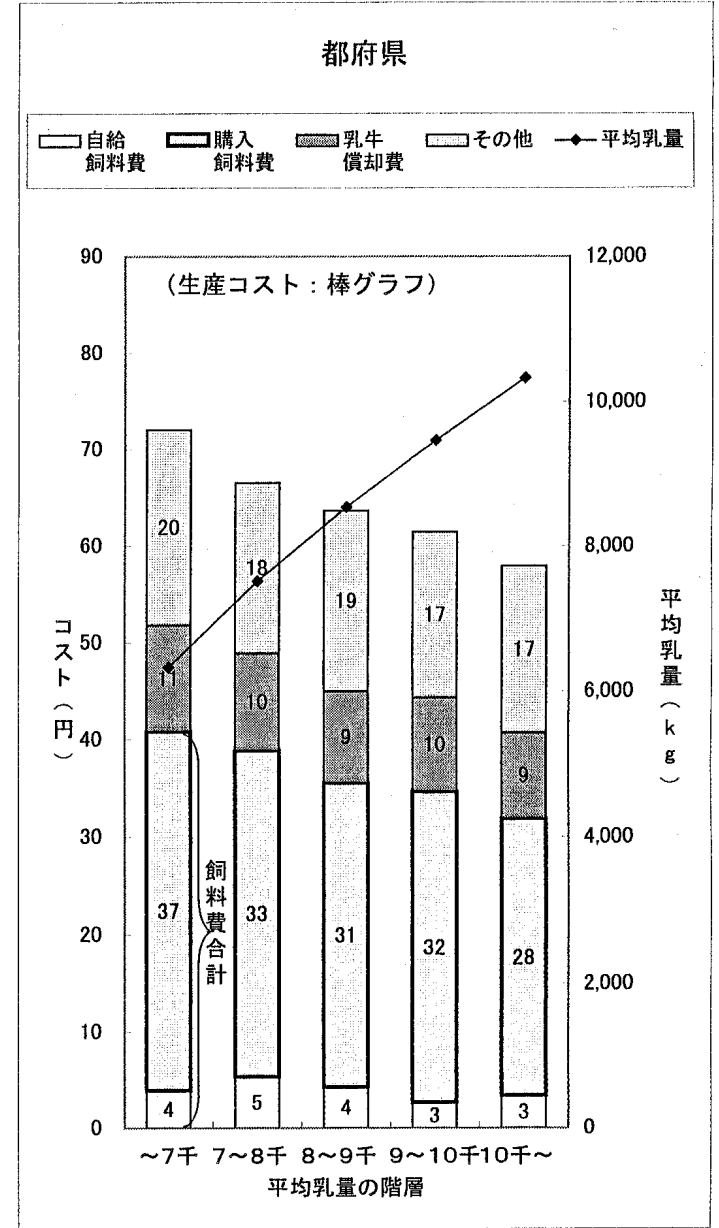
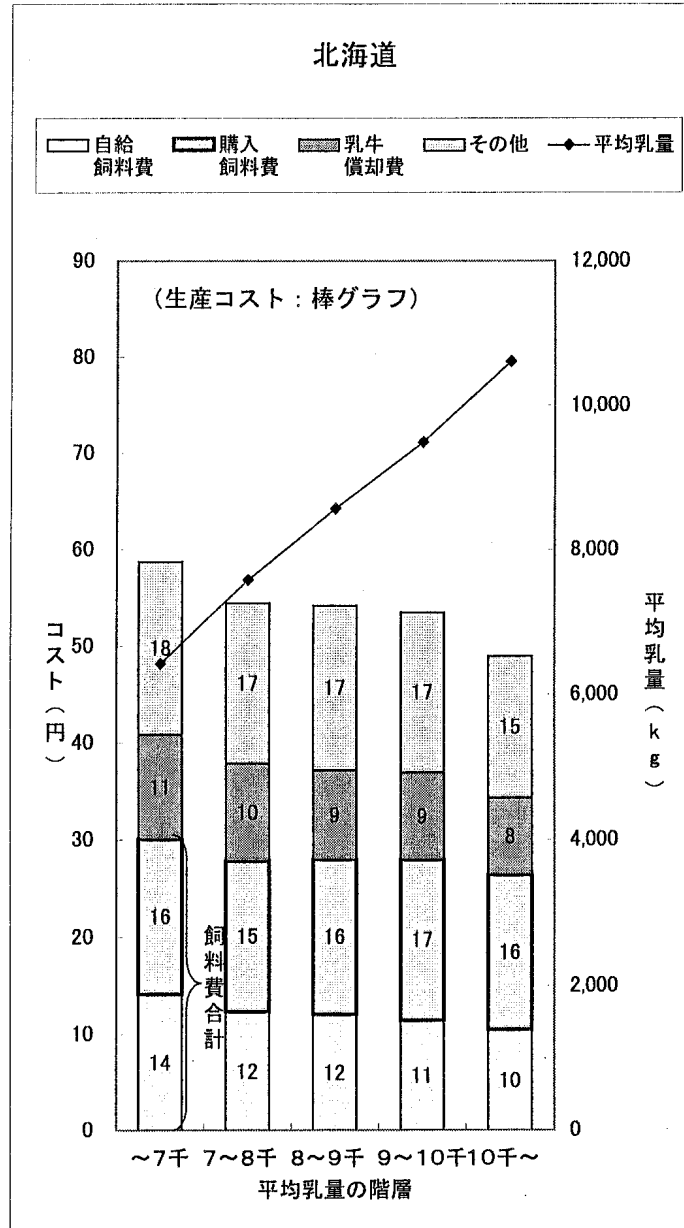
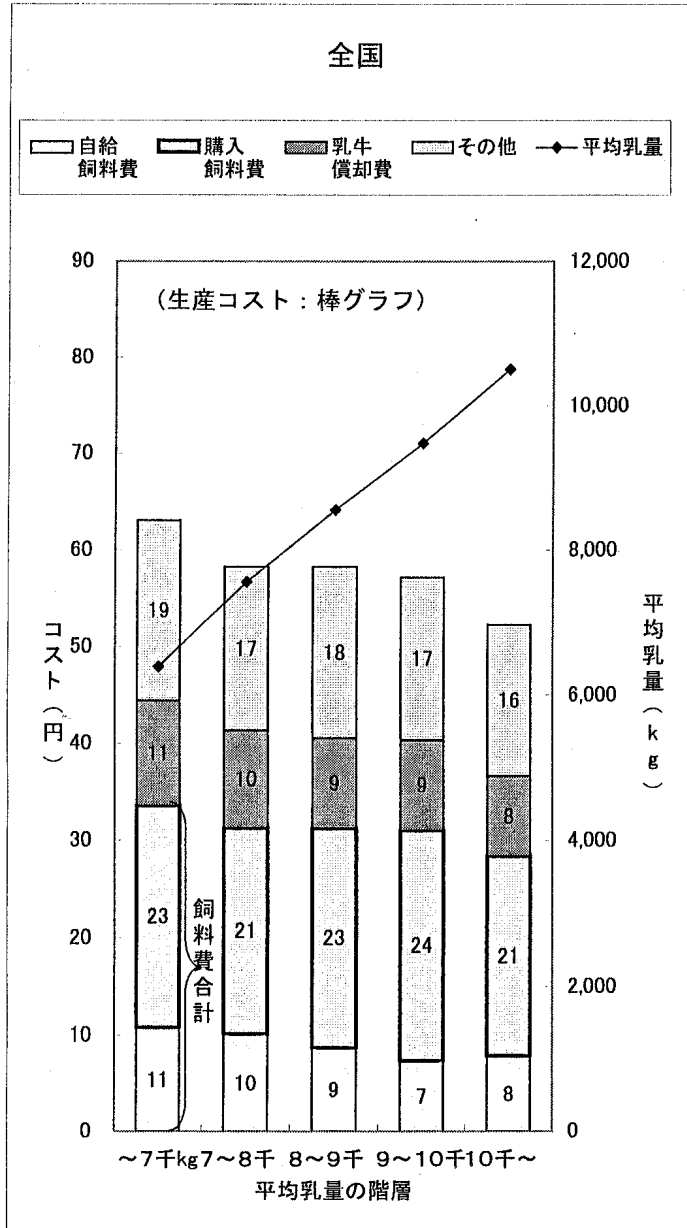


第1回研究会における委員指摘事項検討資料

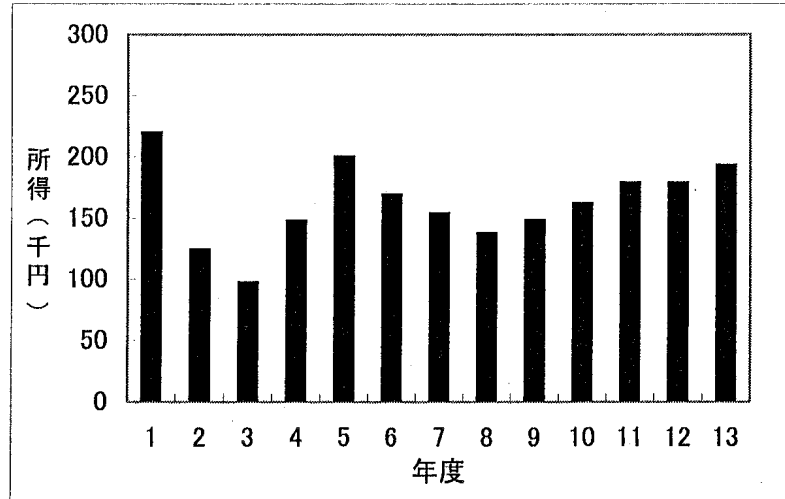
◎生乳1kg(乳脂率3.5%換算)当たりの生産コスト



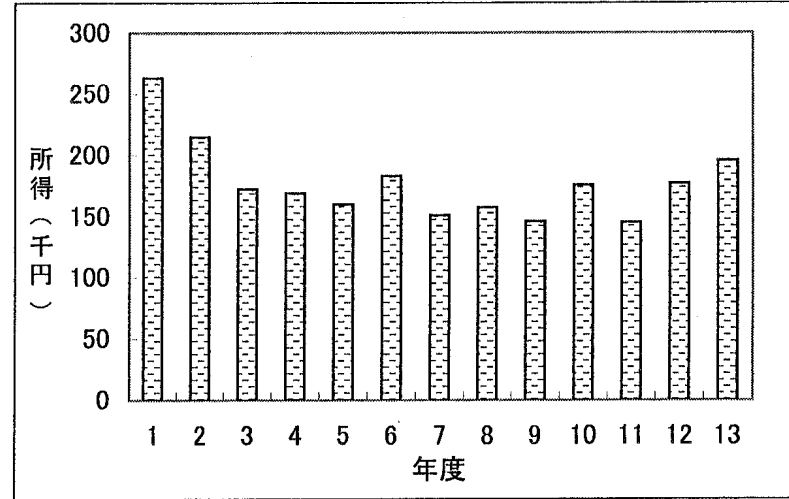
資料：農林水産省統計部「平成15年牛乳生産費調査」による組み替え集計結果

◎経産牛1頭当り年間経営所得

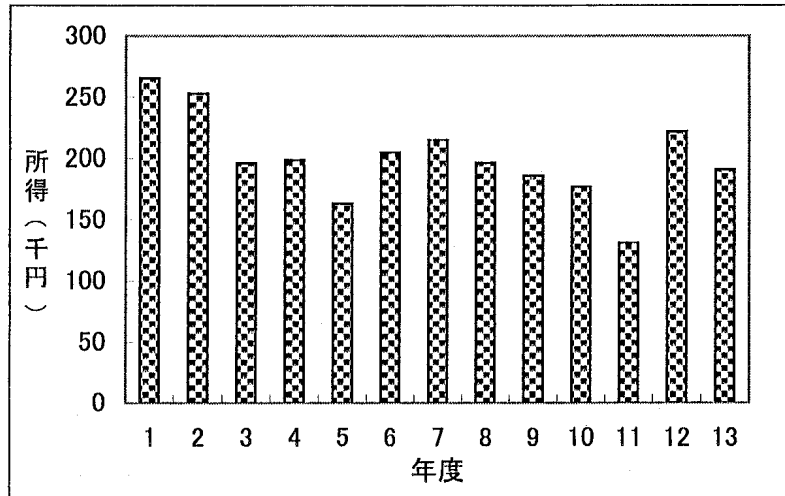
図一1 北海道（草地依存型）



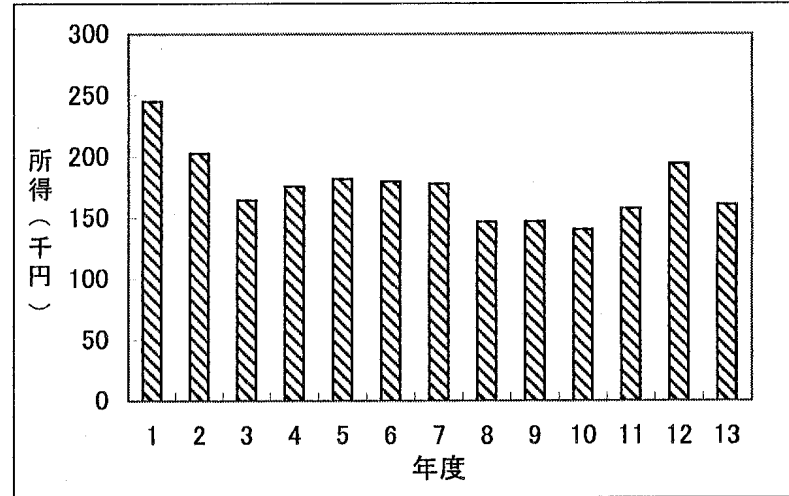
図一2 都府県（草地依存型）



図一3 都府県（耕地依存型）



図一4 都府県（流通飼料依存型）



資料：中央畜産会「平成14年度 酪農経営の収益動向とその要因分析」

注：「草地依存型」とは粗飼料(乾物)の自給依存割合40%以上かつ草地面積の割合が全体の50%以上
 「耕地依存型」とは粗飼料(乾物)の自給依存割合40%以上かつ草地面積の割合が全体の50%未満
 「流通飼料依存型」とは粗飼料(乾物)の自給依存割合40%未満

ジャージー種の改良増殖目標について

1 都道府県における家畜改良増殖策定状況（平成22年度目標）

ジャージー種の改良増殖目標を策定している都道府県

4県

2 都道府県におけるジャージー種の目標水準（平成22年度目標）

県名	乳量	乳脂率	無脂乳固形分	乳蛋白率	分娩間隔	初産月齢
岩手県	7,000kg	5.3%	9.6%	4.1%	12.7か月	25か月
秋田県	6,500kg	5.2%	9.7%	4.2%	13.0か月	24か月
山梨県	6,000kg	5.2%	9.3%	3.8%	13.0か月	26か月
熊本県	6,500kg	5.2%	9.6%	4.1%	13.0か月	25か月
全国	6,500kg	5.2%	9.6%	4.1%	13.0か月	25か月

注：ジャージー種の飼養頭数が最も多い岡山県においては、乳用牛の家畜改良増殖計画は策定しておらず、「岡山県酪農・肉用牛生産近代化計画書」の「1 生乳の生産数量及び乳用牛の飼養頭数の目標」において、ジャージー種の経産牛1頭当たり年間搾乳量を6,050kg/年としている。

（参考1）ジャージー種の子な飼養県別飼養頭数（雌牛）

乳用種の飼養頭数に占めるジャージー種の飼養頭数割合は0.6%程度となっており、岡山県、熊本県の2県で飼養頭数の約49%を占める。

（頭）

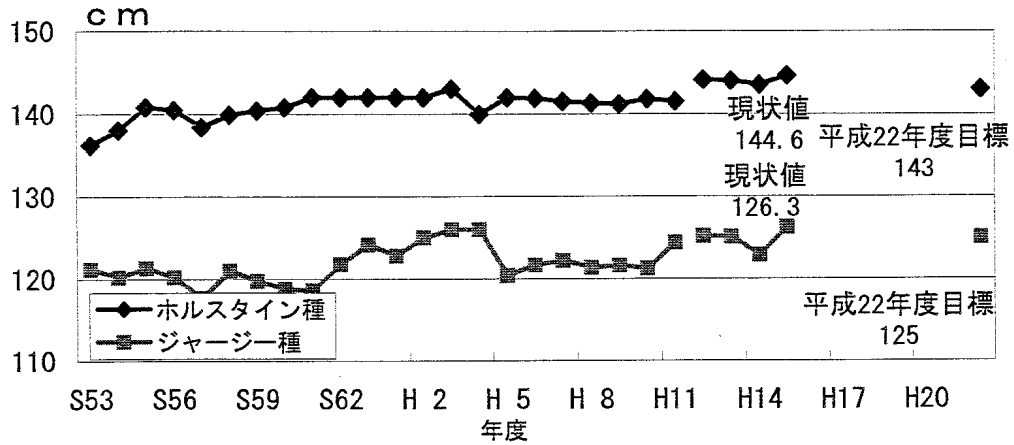
	9	10	11	12	13	14	15
北海道	371	379	347	341	391	487	469
秋田県	426	449	419	441	450	502	566
群馬県	250	258	525	397	454	343	346
岡山県	2,337	2,268	2,596	2,854	3,103	3,311	3,464
熊本県	1,256	1,282	1,310	1,370	1,309	1,070	1,343
その他	4,012	3,914	4,005	4,472	4,086	4,003	3,568
計	8,652	8,550	9,202	9,875	9,793	9,716	9,756

（参考2）肉用牛の改良増殖目標における地方特定品種等の取扱い

平成27年度を目標年度とする肉用牛の改良増殖目標の検討（案）においては、黒毛和種その他、我が国固有の品種である褐毛和種、日本短角種の目標（種雄牛）を策定することとしている。

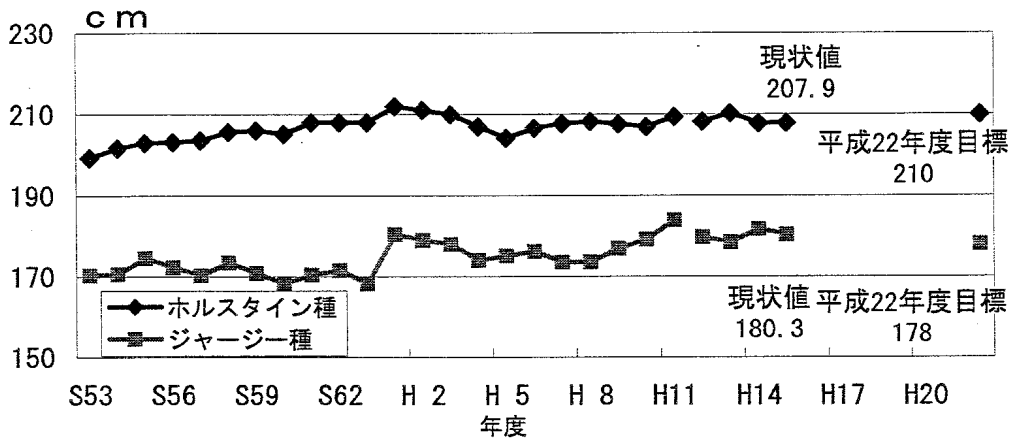
一方、第5次の家畜改良目標（目標年度：平成7年度）までは、無角和種、アンガス種、ヘレフォード種の目標も掲げていたが、第6次目標（目標年度：17年度）からは目標を策定していない。

1 体高の推移



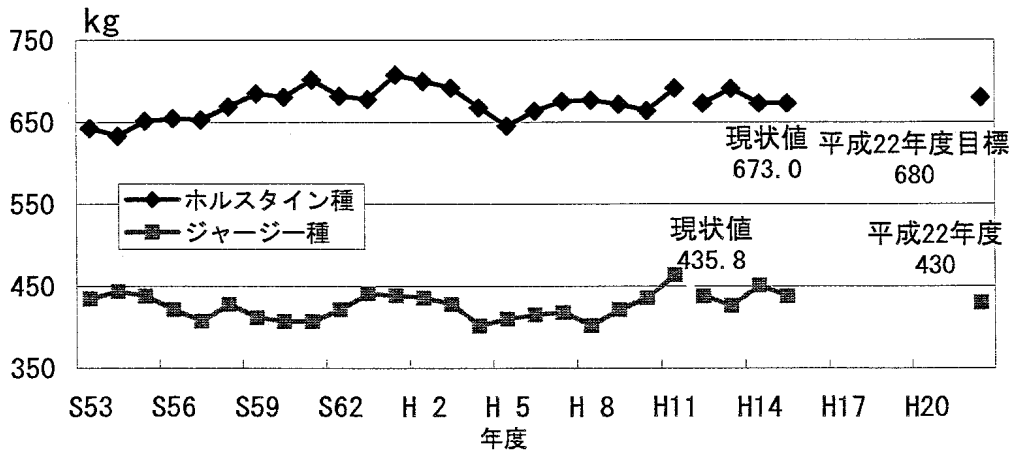
資料:平成11年度までは農林水産省「家畜改良進捗実態調査」、
平成12年度以降は(社)家畜改良事業団「家畜改良状況調査」

2 胸囲の推移



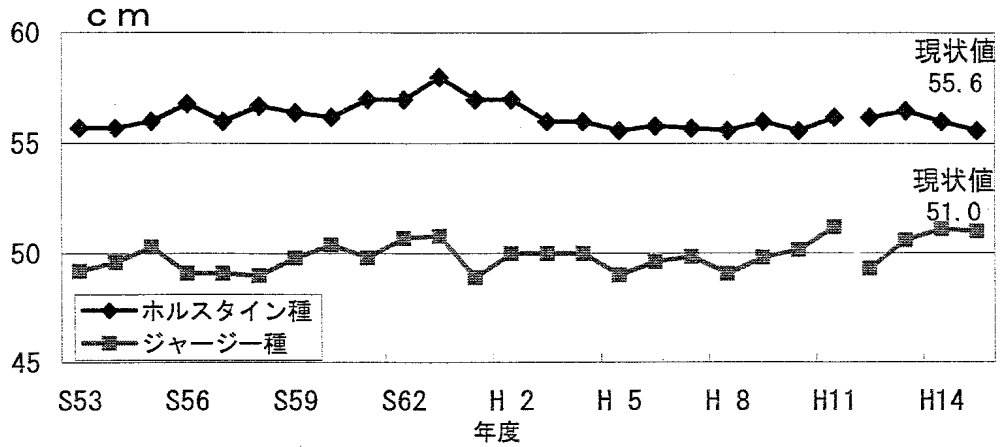
資料:平成11年度までは農林水産省「家畜改良進捗実態調査」、
平成12年度以降は(社)家畜改良事業団「家畜改良状況調査」

3 体重の推移



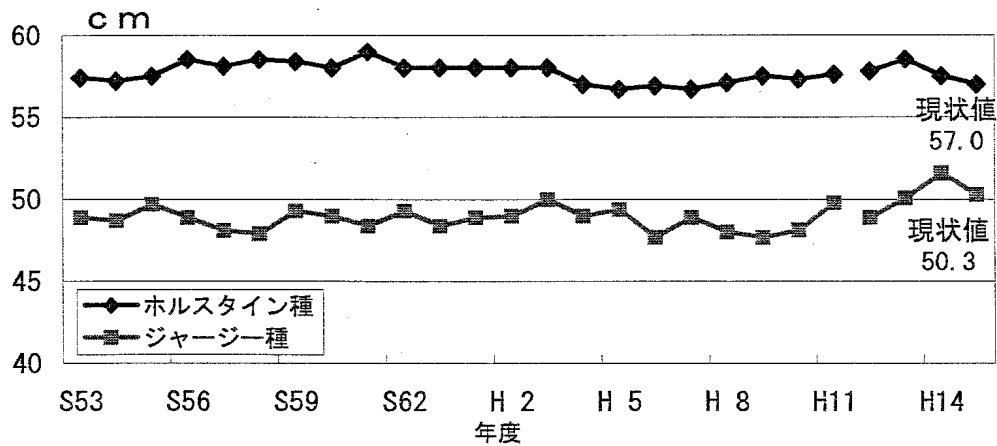
資料:平成11年度までは農林水産省「家畜改良進捗実態調査」、
平成12年度以降は(社)家畜改良事業団「家畜改良状況調査」

4 尻長の推移



資料:平成11年度までは農林水産省「家畜改良進捗実態調査」、
平成12年度以降は(社)家畜改良事業団「家畜改良状況調査」

5 腰角幅の推移



資料:平成11年度までは農林水産省「家畜改良進捗実態調査」、
平成12年度以降は(社)家畜改良事業団「家畜改良状況調査」

乳用牛の肉質に関する改良について

1 肉用牛の改良増殖目標における乳用牛の取扱いについて

平成27年度を目標とする肉用牛の家畜改良増殖目標において、乳用牛の取扱いは以下のとおりとなっており、遺伝的改良よりむしろ効率的な飼養管理による牛肉生産を行う方向で検討されている。

肉用牛の改良増殖目標の検討（案）（抜粋）

II 肉用牛

2 これまでの改良への取組、成果

(3) 改良増殖をめぐる課題

③ 「乳用種・交雑種」固有の課題

ア 乳用種

乳用種の遺伝的改良は、牛乳生産の形質が第一目標であり、産肉能力は考慮されていないことから、効率的な生産をするための飼養管理を行う必要がある。

3 改良増殖目標

(1) 基本的考え方

② 乳用種・交雑種

乳用種及び交雑種の牛肉については、肥育における効率的な生産を図るための飼養管理の改善を行う必要がある。

2 生涯生産性の向上と肉質への影響について

平成27年度を目標とする乳用牛の改良増殖目標においては、生涯生産性の向上を図ることを基本的な考えとして検討を進めているが、生涯生産性の向上が肉質の改善につながるなどの報告もあることから、乳用牛としての生涯生産性の向上を図ることが牛肉資源としても重要と考えられる。

アメリカでの遺伝子育種の研究によれば、ウシ第27染色体上に、「dairy form」（乳用牛の特質）に関する遺伝子座と、脂肪交雑に関する遺伝子座が存在することが示唆されている。

この二つの遺伝子座は関連している。

この「dairy form」は、ボディコンディションに基づいた形質であり、産乳能力と正の相関があることが示されている。